

を中心とする胆道系疾患であったが他の2例は肝癌例で部分的な肝内胆管の狭窄をしめすものと考えられる。腸管像が40分以内にみられた28例は15例中例で、胆のう内結石症の大部分の例では40分以内に腸管像がみられた。び慢性肝疾患の半数の例では腸管の出現が40分以上を要した。血中停滞率(20分値)とICG(15分値)の間には軽度の相関( $r=0.44$ )がみられた。尿中排泄率は投与量に対して1時間11.3%, 2時間14.3%および3時間15.2% (累積量)であった。

その他、コロイドスキンの欠損像の判定の補助手段としての意義のみられた症例を数例経験した。

しかし、この薬剤の本来の目的である胆道系機能検査における意義については、個々の症例については興味ある所見のみられた症例もあるが、さらに多くの例についての検討が必要である。

## 20. $^{99m}\text{Tc}$ -PIによる肝・胆道系シンチの数値解析

伊藤 秀臣 尾藤 早苗  
森本 義人 大城 徳成  
石井 均 山本 和高  
森 徹

(神戸市立中央病院・RI)

$^{99m}\text{Tc}$ -PI投与後の動態解析を試み、若干の知見を得た。＜方法＞空腹時に本剤5 mCiを静注し、仰臥位で60分間、 $\Sigma 410$ カメラ、ガンマー11コンピュータで30秒毎のデーターを収録した。心、肝、胆のう、胆道にROIを設定し、各々のdynamic curveを作成し、これをtwo compartment modelを用いて解析した。肝内代謝を示す減衰率を $\lambda_1$ 、肝への集積速度を $\lambda_2$ 、血中の速い消失を $\lambda_3$ 、血中のゆるやかな消失を $\lambda_4$ とした。＜結果＞ $\lambda_1$ は肝・胆道疾患に異常のない症例では0.015以上、肝・胆道疾患では0.015以下を示すものが多かった。 $\lambda_2$ は幅広い分布を示したが、胆のう・胆道異常や黄疸者に低値の傾向を認めた。 $\lambda_3$ は胆のう異常者に高値例が多くみられ、これらには

腎描出を示すものが多かった。 $\lambda_4$ は、正常人、胆のう異常者に高く肝・胆道異常者に低い傾向にあった。 $\lambda_1$ とAl-Paseには有意ではないが、逆相関がうかがわれた。 $\lambda_1$ と $\lambda_4$ とは $r=0.57$ で有意の相関が認められた。さらにBlood Clearance Index(5分/60分比)を算出したが、正常人及び機能良好者は2.5以上に分布し2.5以下は、全例酵素異常、黄疸を示し、 $\lambda_1$ とは $r=0.68$ と良好な相関を示した。＜結論＞以上、 $^{99m}\text{Tc}$ -PIによる動態解析から、 $\lambda_1$ が肝内代謝観察の新らしい指標たりうることを示し、これが $\lambda_4$ および血中5分/60分比と相関することを示した。

## 21. 肺疾患患者におけるGa-67シンチの検討

煤垣 寛治 岸本 亮  
北田 修 武田 俊彦  
菊池 英彰 杉田 実  
(兵庫医大・3内)  
尾上 公一 立花 敬三  
兵頭 加代 福地 稔  
(兵庫医大・RI)

当院における肺疾患患者94例の $^{67}\text{Ga}$ シングラフィーを検討し、かつ非癌性肺疾患の陽性率が高いことより、諸検査所見と比較検討することにより腫瘍診断の特異性を向上させんとした。肺疾患患者94例中、肺癌63例、非癌性肺疾患患者31例で、それぞれのGa集積陽性率は95%と58%であった。

治療前肺癌63例の組織型別Ga集積陽性率は扁平上皮癌100%、腺癌97%、未分化癌78%となった。なお腫瘍径 $9 \times 4$  cm,  $7 \times 7$  cmと比較的大きな未分化癌の2症例でGa集積が認められなかった。このことより腫瘍径とGa集積所見とは必ずしも一致しないと考えられる。

胸水貯留例における $^{67}\text{Ga}$ シンチグラムの検討では、癌性例で13例中12例(92%)にGa集積陽性を認めている。非癌性例では6例中4例で陰性であった。

$^{67}\text{Ga}$ シンチ陽性者の諸検査所見を検討したと